『ちくま評論選』解説

2　「キャラ化する若者たち」斎藤環

■凡例

1　①②…は形式段落番号。◆は、設問。
2　▽は、本文の追跡・分析。（解答例だけではなく、ここをこそ、読む。）
3　▼は、読解に関する技法。
4　☆は、記述に関する技法。

■前提　『現代文キーワード』で知識を押さえよ。（後から読んでもよい）

・一五六頁あたりの「自我」「アイデンティティー（自己同一性）」
・二五四頁・テーマ１「自己／他者」
・二五七頁の「再帰的自己」も。

■追跡

①　人にはおそらく〝幸福の才能〟というものがある。偶然の成功体験を、これは必然の運命だったと自分に信じ込ませる才能のことだ。そうした必然性への〝信仰〟が、自らを取り替えのきかない固有の存在であるとみなす確信の基盤にある。それを〝信仰〟と言ったのには理由がある。まず、そこには何も根拠がないこと。そして、多くの若者がその〝信仰〟を捨てつつあること。

②　必然性や固有性の名において匿名性を回避できないならば、もはや逃げ道はないのだろうか。

▽独特の表現を、自分でかみ砕きつつ、読んでいこう。まず、問いは何だろう。問いを嗅ぎ取る一つの手は、▼**「よい」ニュアンスの言葉と「悪い」ニュアンスの言葉を区別する**ことだ。ここでは、偶然を、本人が「これは定められた天命だ」と解釈し直すことが、自分が自分であるという揺らぎのない確信を持つことにつながっている、という部分が、「よい」こと。しかし、じつはそこに確かな根拠がなく、確信（＝信仰）が失われつつある。ここが「悪い」こと。

　現在の若者が、自分は自分であるという確信を持てないようになってきている（かつてはまだあったのに）。このように捉え直せば、問いのありかは見えてくる。

　「必然性や固有性の名において匿名性を回避できない」がわかりにくい。「匿名」とは本名が隠されていることだから、「匿名性」とは、自分が誰だかわからない、確信が持てない様子を指していると考えられる。こうなる必然の運命だ、おれは取り替えのきかない固有の存在だという確信が持てない状態から逃れることはできないのか！　こう翻訳できるだろう。

③　1ここにおいて要請されたのが「キャラ」なのである。

④　自分の取り替えのきかなさ、すなわち「固有性」には、つきつめてしまえば根拠はない。つまり記述不可能だ。たとえば精神分析は、この無根拠な一点においてこそ、人間の主体は支えられると考える。これがいわゆる「否定神学」だ。

▽「否定神学」などといわれると、わけがかわらなくなる。そんなときは、放っておこう。追跡の軸は、「確信が持てない」ときに「キャラ」が要請された、ってどういうこと？である。無根拠だからこそ、主体は支えられる、という部分は、根拠がないから、根拠を求めようとする主体が起動する、という位の意味にとっておく。私はAではない。私はBでもない。では私は何だろう？といった自分探しのダイナミズムだ。

⑤　伊藤剛の指摘で有名になったキャラクターとキャラの区分について言えば、キャラクターはこうした固有性をどこかに秘めている。しかしキャラにはその意味での「固有性」は乏しい。

▽「キャラクターとキャラの区分」が明示されているわけではない。ただ、「キャラ」＝固有性を欠く／「キャラクター」＝固有性がある、という違いは見える。

⑥　しかし、この確率的な世界にあっては、◆1そのような固有性を信ずることはできない。すべてが偶然的であるという信仰は、〝このただ一つの世界におけるただ一人の自分〟という必然性への信仰を土台から掘りくずす。そう、つまるところこのふたつの信仰は、カント以来の「偶然と必然のアンチノミー」の問題に帰結するのだ。つまり、いずれの信仰にも根拠はない、ということ。しかしたまたま現代においては、諸般の事情から「すべては偶然」教の勢力が優勢であるということ。

▽話が回り道に入っていることに気づこう。「キャラを要請」って何？という問いを手放さないように。◆1の問いだけを確かめよう。「固有」という▼**キーワードをさかのぼっていく**だけで内容は見つかる。①段落にあり。「固有」は使ってはいけない。

◆1「自らが、取り替えのきかない存在であること。」

　アンチノミーも読み飛ばせばいい。大事なのは、「たまたまですよ」（偶然）も「こうなる運命なんですよ」（必然）も、どちらにも根拠はないといっている点。この感覚は、全能の神や、歴史の必然といったストーリーを信じられなくなった現代に特有のものだ（もちろん、文化によって程度は違うけれど）。

⑦　「すべては偶然」教の世界観のもと、個人は取り替え可能な存在として匿名化されると同時に、もう一つ重要な変化が起こる。それは「世界の複数化」だ。同じことだが、世界の多重化と言ってもいい。このふたつは表裏一体の関係にある。個人の匿

名化が世界の複数化を要請し、世界の複数化は個人の匿名化を必然的にもたらす。

⑧ あなたは大きな成功体験をおさめた瞬間に、こんな感覚を持ったことはないだろうか。「ああ、今回はたまたまうまくいった。でも『次の人生』でも同じように成功できるだろうか……。」と。告白すれば、実は僕は、しばしばそういう感覚に襲われる。そう、この瞬間だ。〝私の世界〟が複数化し、◆2〝私〟が匿名化にさらされるのは。

⑨ もし心から「人生は一回きり」と信じられていたら、成功体験をしみじみと味わい、明日からの自信につなげることができるだろうに。

▽先にあった「このただ一つの世界におけるただ一人の自分」という確かさの裏返しが、①自分は取り替え可能な存在だ②世界は他にもある、という不確かさの感覚だ。筆者のように「次の人生」と感じるかどうかは個人差があるかもしれないが、「次の機会」「違う場面」では?と思うことはあるかもしれない。「大きな成功体験」なんてないよ、っていう人あるかもしれないが…。

〈私〉が「匿名化」にさらされる、とは、今示した①の「自分は（かけがえのない本名をもった存在ではなく、どんな名前で呼ばれてもよいような）取り替え可能な存在だという感覚に襲われることだ。これは一種の〈不安〉に根ざした心理である。

◆2 「自分は取り替え可能な存在だという（不確かな・不安な）**感覚に襲われること。」**

⑩ 長い前置きになったが、この「すべては偶然」教とキャラには、かなり密接な関係がある。匿名化にさらされた個人の心に、固有性とは別のしかたで一つのまとまりを与えてくれるのが「キャラ」なのだ。記述しきれない固有性とは異なり、キャラは（1）記述することが可能である。むしろ、常に記述されなければ存続できない存在がキャラなのだ。

▽「キャラ」なるものが要請されるわけは何?という問いに戻ってきた。自分は取り替え可能な存在だという（不確かな・不安な）感覚に襲われている個人の心に、「キャラ」は一つのまとまりをもたらしてくれるから。そう筆者はいう。

とりかえできない・かけがえのない（固有性をもつ）私（私は私だという確かな感覚）というものは、当人が内面的にそれを実感するもので、言葉にする（記述する）ことはなかなかできない。しかし、「私は○○キャラだ」ということは、言葉にできる。むしろ、「私は○○キャラだ」と言い続ける（ずっと名札をつけている感じ）ことで、キャラは持続する。

⑪ また、キャラのもう一つの特徴として、（2）複数の世界のどこにあっても、そのキャラの同一性を維持できる、ということがある（ここでとっさに『ドラえもん』のタイムスリップものを思い出したあなたは正しい）。先ほどの僕の個人的感覚に即して言えば、この人生でも「次の人生」でも、キャラは変わらない、ということだ。

▽キャラの二つの特徴。（1）記述可能（2）世界が変わっても変わらない。ドラえもんとかさ、アニメのキャラってさ、恐竜世界とか宇宙とか学園とか、〈世界〉が変わってもさ、いっしょじゃん。そのキャラのまんま、活躍するじゃん。

⑫ ◆3そんな中でキャラを維持させてくれるのが、コミュニケーションの力なのである。「かけがえのない世界の、かけがえのない自分」に対する〝信仰〟を失った個人が、こころの安定をキャラに託そうとするなら、キャラの記述＝相互確認を可能にしてくれる再帰的コミュニケーションの中に、繰り返し身を投じ続けるほかはない。実際、それ以外に手段はないのだ。

指示内容に、ぱっと直前を入れたら失敗する例。キャラは変わらないことの中で、キャラが維持される（変わらない）、では意味不明。どんな状況で、なぜ、キャラが要請されているのか、という、もう一つ前の段落の内容が入る。後に続く「こころの安定をキャラに託そうとする」も、同じこと。これをベースに、ちょっと補ってまとめてみると、

◆3 自分は取り替え可能な存在だという、不安定な感覚に襲われている心が、キャラによって、一つのまとまりを得ようとしている状態。

「キャラの記述＝相互確認を可能にしてくれる再帰的コミュニケーションの中に、繰り返し身を投じ続ける」っていうのは、わかりにくいよね。こういうのはどうすればいいんだろ。有力な手は、**▼身近な実例をなんとか思い浮かべる**こと。「キャラで自分を保つ」って?と考えると、浮かぶだろう。ここでいっているキャラとは、高校生がふつうに使っている「キャラがかぶっている」なんていうときのキャラのことだ。「あたしはゆるキャラだ」と言葉にする。「あなたってゆるキャラね。」とみんなが認める。「やっぱ、あたしはゆるキャラだよね」と「ゆるキャラ」らしく、ふるまう。再帰的とは、『現キー』によると、自分のしたことが、ブーメランのように自分に返ってくること。「繰り返し身を投じ続ける」というのは、自分はゆるキャラだということを繰り返し演じ続けるということだ。だんだんわかってきた?

⑬ 2ただコミュニケーションのみが、みずからのキャラ＝再帰的同一性を維持してくれるということ。

⑭ ◆4それは偶然性と匿名性という、いわば流動性のきわみに身をさらしながら、辛うじて自意識の同一性と連続性をつなぎとめる、ほぼ唯一の手段だ。その意味でキャラの獲得は、仮の待避所として束の間の安心を与えてくれはする。しかしその代償も、決して小さいものではない。

▽◆4の内容は、直前。代入できるように形を変えるだけ。

◆4 コミュニケーションによって、みずからのキャラを維持すること。

繰り返しキャラを演じ続けることによって、キャラを維持する。そうすることで、なんとか、自分であることの安定（自意識の同一性と連続性）を保つ。クラスの中で、みんなやってることじゃん。

でも、それは「仮」「束の間」のもの。「代償」も大きい。え―？　それじゃダメじゃん！

⑮　代償とは何か。まず第一に、(1)キャラ化は成長と成熟を阻害する。

⑯　どんなキャラでも、その記述が常にコミュニケーションの中でなされる以上、キャラからの逸脱はほとんど〝本能的〟に忌避される。だから、一度自分のキャラが確定してしまったら、そこから「降りる」ことはほぼ不可能となるのだ。

⑰　完璧な、すなわち誤解やノイズを含まないコミュニケーションは、完璧な相互理解をもたらすと同時に、〝そこで理解されてしまった自分〟＝キャラへの強い固着をももたらさずにはおかない。この固着こそが、個人の変化と成長を妨げる当のものなのだ。

▽実例に則して理解すれば、かなり読みやすくなったのでは。「あなたはゆるキャラ」と規定されてしまうと、ずっとそれで行かなきゃならない。でも、「ゆる」のままでは、安定はあっても、成長がない。

⑱　(2)自己否定的な自己愛も、おそらくここに由来する。コミュニケーションを通じて、たまたま否定的な自己イメージ（インキャラ、非モテキャラなど）に固着してしまった個人は、否定的な自己イメージのリアリティ（それがたしかにそこにあること）を再確認することによってしか、自己愛を維持できなくなってしまうからだ。

▽「ダメな自分への愛」。そういうものがある。それもまた、キャラによる自己安定の一例であり、「代償」の一つである。「非モテキャラ」に認定されるなど、好ましいことではない。しかし、非モテな私、というキャラであっても、それを持っていることによって、自分を保つことはできる。自分を傷つけるという「代償」と引き替えではあるけれど。

⑲　周囲からネガティブなキャラ認定をされてしまったにもかかわらず、そうしたキャラを◆5積極的に引き受け、演じているようにみえる個人が少なくないのはそのためである。不本意なキャラを引き受けるのは辛いことだ。しかし、そんなキャラでもひとたび失ってしまったら、大げさではなしに〝この世界〟に居場所はなくなる。それは、いやなキャラをあえて引き受けるよりも、はるかに恐ろしい事態なのだ。

⑳　このとき、自傷や自己否定といった、いわば自分自身とのコミュニケーションもまた、キャラを確定するような再帰性をはらむ。

▽◆5否定的なキャラを積極的に演じるのはなぜ？　この段落内では、「**否定的なキャラでも、ひとたび失ってしまったら、この世界に居場所はなくなるから。**」前の段落の言葉を使うなら、

◆5　否定的ではあっても、自己イメージがたしかにそこにあることを再確認することによって、自己愛を維持することができるから。

☆**前者は、「しないと、なくなるから。」という否定型。後者は、「することによって、できる」という積極型。**理由を書くとき、この二つの型のどちらかになることが多い。勉強しないと落第する、というか、勉強することによって合格する、というか。文脈によってはどちらでもいいこともあるが、論旨によっては、どちらかでないと適切でないということもある。今回は、〈どちらでもいい〉。

・精神科医として困惑せざるを得ないのは、こうした自傷的キャラ設定がいったん成立してしまった後で、肯定的な自己愛をいかにして回復させるのか、そこに確乎とした答えが見あたらないということだ。

・この問題は言ってみれば、〝安全や自由のほどよい充足〟と引き替えに、とめどなく人人が匿名化へと向かうほかはない3現代的趨勢に抗うべく、あえて「固有性」を擁護する、という極めつけの難問にほかならない。この問いに対して少なくとも理論的には、すっきりした解はみあたりそうにない。

▽なかなか悲観的な見解だ。自虐、自傷的なキャラからの解放は困難だ、と、この精神科医はいう。「固有性の擁護」といった、いかつい言葉を翻訳できるようになっているだろうか。かけがえのない私を大事にする、ということだ。そう書いてくれればいいのに、と思っちゃうけど。キャラ設定による仮の安定の裏で、私の代わりはいくらでもいるという感覚（取り替え可能・匿名化）はどんどん広がっていく。ネガティブキャラが設定された場合、ここにあるのは終わりのない悪循環だ。そんな風にしてやっと生きている人に、「自分を傷つけるな、かけがえのない自分を大事にしろ」ということ。彼は言うだろう、「ではどうやって生きていけば？」。これを筆者は難問という。

・自己愛にとって最も重要なものこそが、再帰的コミュニケーションによって維持される「自己同一性」であるということ。それがすでに成立してしまっているのなら、そのこと自体の当否を問うのは難しい。そこには問題のみならず、それと◆6同程度のメリットも想定されうるからだ。

・ここで僕が記しておいた「自己同一性」という言葉には特に注意を促しておきたい。この、あまりにも人口に膾炙した言葉は、まったく自明のものではない。「自分が自分である」ということの拠り所は、おどろくほど「はかない」のだ。

▽◆6「メリット」については、ここまで読んだ理解によって、自分の言葉で書いてみよう。安心、安定、まとまり、居場所。ここまで登場した用語を利用する。例えば、「居場所」で、☆**とりあえず書く**。「この世界に居場所を見つけること。」とか。

◆6　「不安定な自己の感覚から逃れ、自己にまとまりを感じ、この世界に（とりあえず）安定した居場所を見つけられるというメリット。」

最後まで読むとわかるが、この文章には、「断片化と全体」と通底する主題が流れ

ている。それは、「バラバラ・不安定な感覚が、統一・安定を求める」という現代の問題である。「断片化と全体」は、デジタルデータ、ここは、「キャラ」という〈断片〉を、それぞれモチーフ（材料）として論じていたということだ。さらにいうと、「断片化と全体」では、それがフェティシズムをもたらすという危うさ、ここでは、それが未熟さや自傷の悪循環をもたらすという危うさ、を指摘していたわけだ。

■読解問題

1 「ここにおいて要請されたのが「キャラ」なのである」とあるが、なぜキャラが「要請された」のか。

⑩段落の本文と〈追跡〉参照。⑩段落「一つのまとまりを与えてくれるのが「キャラ」なのだ」。ここが答えだ。**☆押さえを書く**。「キャラは、一つのまとまりを与えてくれるから。」あとは、「ここ」の指示内容を補う。「自分は取り替え可能な存在だという（不確かな・不安な）感覚に襲われている」状況。これらをドッキングする。ここでは必須ではないが、主語を立てると構文はおちつく。

【解答例】現在の若者は、自分は取り替え可能な存在だという不確かな感覚に襲われているが、キャラは、その自分に一つのまとまりを与えてくれるから。

2 「ただコミュニケーションのみが、みずからのキャラ＝再帰的同一性を維持してくれる」とはどのようなことか。

ややこしいときは、**☆そのまんま式**。そのまんま、「コミュニケーションだけが、キャラを維持してくれるということ。」と、とりあえず書く。それから、**☆切り身の方法**で言い換えていく。「コミュニケーションだけが、／キャラを維持」と二つの部分に分けて、それぞれを言い換える。⑫段落参照。

「設定されたキャラを繰り返し演じ続けることだけが、／そのキャラを維持する方法であるということ。」ここまでメモできれば、もう少し詳しく書くこともできるだろう。

【解答例】自分でキャラを言葉にし、他者からもそのキャラを認められ、そのように認定されたキャラを繰り返し演じ続けることだけが、そのキャラを維持する方法であるということ。

⑫段落に「「かけがえのない世界の、かけがえのない自分」に対する信仰を失った個人は…再帰的コミュニケーションの中に、繰り返し身を投じ続けるほかはない」という部分がある。キャラは、「かけがえのない世界の、かけがえのない自分」という不変の確信ではなく、場や他者とのやりとりによって形成される。どうしてコミュニケーションだけなのか、についても入れようとするなら、**「キャラは、かけがえのない自分ではなく、他者とのやりとりの中で形作られるものなので、」**と頭に足すこともできる。

3 「現代的趨勢」とはどのようなものか。

☆傍線部を延長して、「安全や自由のほどよい充足と引き替えに、とめどなく人人が匿名化へと向かうほかはない現代的趨勢」という全体を言い換える。

キャラについてのことに限定して書くなら、**「キャラを設定することによる仮の安定の裏で、私の代わりはいくらでもいるという感覚（取り替え可能・匿名化）がどんどん広がっていっている、ということ。」**といった解答が可能。

しかし、さらに考えてみると、キャラは、「安全や自由のほどよい充足」を満たす手段の一つに過ぎない。本文に具体的なことが出ているわけではないが、解答例の前半部を次のように取り替えることもできる。

【解答例】高度に発達した技術や社会システムに守られて、何となく安全や自由を享受している裏で、私は私であるという確かさが失われ、私の代わりはいくらでもいるという感覚がどんどん広がっていっている、ということ。

物理的な「安全」や経済的な「自由」があるからといって、「安心」や「充実」や「幸福」が満たされるとは限らない。むしろ、その追求の果てに、今の課題が横たわる。少なくともこれ以上の疎外感や、沈潜したエネルギーが暴れ出すことによる秩序崩壊を招かないために、わたしたちは、帰るべき場所へ帰らねばならないのではないか。キャラ、がそのための戦略の一つであるのかどうか。私たちの問いであろう。